



人形劇団の魅力に迫る！

マディーナット エルアハラム

Madinat Al Ahlam

～エジプトの子どもたちの笑顔のために～
マルチエンターテインメントを届ける日本人たちの姿



人形劇

「子どもたちは未来の宝」



劇団名である”Madinat Al Ahlam”は日本語で”夢の街”(通称:マディーナ)。劇団の活動テーマは“**娯楽の少ない地域に住む子どもたちに笑顔になってもらう瞬間を届ける**”です。公演会場は保育施設や孤児院、公立図書館などカイロ県を中心に、スエズ県やアレキサンドリア県など地方でも行っています。人形劇をはじめ、パントマイムや手品などの演目を中心に、エジプトの子どもたちに様々なエンターテインメントを届けています。



人形劇「子供たちは未来の宝」のあらすじ
”**貧しい家庭で生まれ育つ2人の兄妹が主人公。障害を持つ兄のアリと妹のヘバ2人が不思議な力を持つタブラおじさんの力を借りながら、困難にもめげずに努力をし続け、それぞれの夢をかなえる物語。**”



人形劇の登場人物は全部で11人。演者はアラビア語の音声に合わせて人形を動かします。人形だけでなく、背景幕や小道具などを駆使して演出しています。公演当日は人形劇舞台の組み立てや音響など、舞台設営から一つ一つ自分たちで作り上げます。

慣れない言語の音声に動きやタイミングを合わせる難しさもある中、練習を重ねて少しずつ完成に近づく過程をメンバーは楽しんでいます。様々なバックグラウンドを持つ大人たちが集まり、マディーナの活動を通して交流を深めています。

～人形劇に込められた想い～

エジプトには“3大弱者”と呼ばれる人々がいます。女性・障がい者・貧困者。この人形劇では、エジプトの子供たちに向けて“たとえ今は恵まれない状況におかれていても、あきらめずに努力をし続ければ道は必ず開けることを伝えたい”という希望と想いが込められています。



パントマイム



ピエロとシュシュという女の子の2人によるパントマイム。言語を飛び越えた笑いの交流が最大の魅力。ピエロの愉快的動きとシュシュとのやりとりで、公演会場は大盛り上がり！

笑顔を生み出す 様々なエンターテイメント



笑顔は伝染する。
元気をもらっていたのは
こちらのほうだった。

手品



各公演で5～6種類の手品をみんなで分担しパフォーマンスします。目の前で子どもたちの目が輝く瞬間を見られた時の感動はひとしお！時にはアラビア語も交えながら、表情やジェスチャーを使って子どもの興味を引き付けます。

ワークショップ



日本文化の一つである「折り紙」紹介では、特に紙飛行機や手作りけん玉作りが子どもたちに大人気。そのほか手先を使ったアクティビティやぬり絵などを一緒に楽しみます。団員の子どもたちも習ったアラビア語を使って交流を楽しんでいます。

子どもたちの真剣な眼差し。
それは、夢と希望に満ちた
果てしない輝き。
それを目の前で見られる幸せ。



マディーナの誕生秘話 ～生みの親・神谷哲郎さんに聞く～

かみたに てつろう

マディーナの” 始まり” とこれまでの” 歩み”

1999年 神谷哲郎さんがJICA協力隊員と共に各地の教育施設で手品やパントマイムをパフォーマンスするグループを結成。

2006年 神谷さんがJICA協力隊調整員としてエジプトに派遣され、幼児教育や青少年活動に関わる協力隊員2名と共にマディーナを結成。

「異なる任地で挑戦している協力隊員にとっての“もうひとつの居場所”をつくりたい」との思いから、神谷さんが協力隊員に声をかけ結成に至る。3人でエジプトの子供たちのために何かできないかと模索。当初は手品やパントマイムをやっていたが、神谷さんが長年活動してきた人形劇の経験と手持ちの人形を生かし活動の幅を広げる。現在の人形劇「子どもは未来の宝」はこの時にその協力隊員が書き下ろしたものの。アラビア語の音声は現地のスタッフに協力してもらい、パソコンのレコーダーから録音。

※エジプトでの革命や神谷さんの任期による帰国などにより一時活動が途切れる。

2017年 神谷さんが再びエジプトに赴任。

2022年 安藤抄苗さんも加わり新生マディーナ再結成となる。協力隊員のみに限らず、様々な業種やバックグラウンドを持つ人々がメンバーとなり活動する。

2024年 神谷さんはJICA専門家としての任期満了となり帰国。マディーナは安藤さんにバトンタッチされ、現在のマディーナに至る。



マディーナの現リーダーにインタビュー ～「夢の街」を引き継いで～

安藤抄苗(Sanae Ando) さん [JICA幼児教育専門家]

人形劇が紡ぐ、子どもと大人の“豊かな”時間。
2022年冬、エジプト・カイロにて再出発を果たした人形劇団「マディーナ」。そして2024年夏、その新たな舵を取るようになったのは、長年子供教育に関わる仕事をし、異文化の中で人と人をつなぐ活動に取り組んできた安藤抄苗さんです。なぜマディーナを引き継ごうと思ったのか、活動を続ける中で感じるモチベーションややりがい、そして安藤さんにとってのマディーナとは—その思いに迫ります。



Q. 神谷さんからマディーナ引き継ごうと思った理由は何ですか？

マディーナを引き継ごうと思った理由は、大きく二つあります。一つ目は、「人と出会う場」としてのマディーナの可能性を感じたことです。普段の生活や仕事では出会わないような人たちと出会い、一緒に何かをつくるという場がこのマディーナの活動の中にはあります。私は人が好きで、でも人が嫌いでもある……そんな矛盾も含めて、人と関わることに価値を感じています。マディーナは、私のような人間にとって心地よい“社交場”であり、自己表現の場でもあるのです。

もう一つは、エジプトに住んでいるからこそできることをしたいという思いです。生活しているからこそ見えるエジプトの人々や文化、子どもたちのリアルな姿。それらと関わりながら、自分にできることを形にしていきたいと考えました。マディーナの活動は、私にとってまさにそのチャンスでした。

Q2. 活動する上でのモチベーションは何ですか？

モチベーションの源は、子どもたちの笑顔と、メンバーとの「一緒につくる」時間です。子どもたちは、人形劇やマジック、パントマイムの世界にぐっと引き込まれていきます。目を輝かせながら笑う子どもたちの姿は何度見ても胸を打たれますし、そんな瞬間に立ち会えるのは本当に幸せなことです。「たのしい！」という感情は、言葉を超えて心をつなぐ力があると感じています。また、週末に集まって、大人たちが真剣に練習を重ね、舞台を一から作り上げていく過程も大きなやりがいです。私自身、親になって感じるのは、**大人が楽しんでいる姿を子どもに見せる機会の大切さ**。マディーナでは、親ががんばる姿や楽しむ顔を見せられる場でもあります。そして子どもにとっては、年齢や性別を超えた新しいコミュニティに出会える場にもなっていると感じています。



📷 スエズ公演にて

Q3. 安藤さんにとってマディーナとは

私にとってマディーナは、「心が動く場所」です。2005年、マディーナ創設者の神谷さんとフィリピンで出会い、現地の人形劇団「サマカナ」に参加したことが、私の世界を大きく広げてくれました。そこから日本でも人形劇を通じて地域や保育の現場と関わってきました。そして今、エジプトという新しい土地で、また「人とつながる場所」を作ることができています。マディーナには、人生経験も国籍も異なる大人たちが集まります。慣れないアラビア語の音声に動きを合わせる難しさ乗り越え、ひとつの舞台をつくりあげる。その過程で得られる**達成感**や、互いを理解し合うプロセスは、何物にも代えがたいものです。（もちろん、公演後の飲み会も格別！）マディーナは、**夢を語る場**であり、現実の中で「楽しい」を届ける手段であり、そして**私自身が成長し続けるための場所**。子どもたちに笑顔を届けながら、私自身も学び、笑っている—そんな循環を生み出してくれる、大切な“夢の街”です。

安藤さん、今回は貴重なお話をありがとうございました。



📷 Misr public library公演にて



📷 ショブラ公演にて



直近では、イスマイリヤやマンシェットナセルの保育施設でも公演予定です！



マディーナメンバー 随時募集中です！

マディーナの活動に興味がある！公演を見に行ってみたい！という方は、以下までご連絡ください。みなさんの参加をお待ちしております。

代表者：安藤抄苗 Email: peachsanae@gmail.com

